
《天之女神 - 討魔伝記》 ~ BASTAR・闇を狩る者 ~

水樹ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《天之女神 - 討魔伝記》 ～ B A S T A R ・ 闇を狩る者 ～

【Nコード】

N 2 9 7 1 Z

【作者名】

水樹ヒロ

【あらすじ】

滅亡寸前の世界に現れた赤衣着物の少女…。

その手には、意思を持つ一振りの剣があった。

突如として現れた謎の生物【クリーチャー】を相手に、少女は今日も戦場を赤く染める…。

紅衣着物の少女

時は、西暦2015年9月。

日本から南極の調査に来ていた、とある大学の一団が謎の微生物を発見した。

一団は凍眠状態だったその未知なる微生物を調査する事に決定。

世界中の有名大学や各国の研究機関も南極へ向かい、合同調査が開始された。

西暦2016年11月。

東京近郊で、正体不明の化け物を目撃する事件が発生。

警視庁と防衛庁が合同で調査隊を派遣するも、原因は不明。

同時期：謎の微生物を研究していた南極調査隊や研究員らが突然、消息を絶つ。

西暦2017年2月。

世界各地に人型の化け物が一斉に姿を現した。

国連は異常事態宣言を発令。化け物を【クリーチャー】と呼称し、各国の軍隊がクリーチャーの掃討に乗り出した。

しかし…異常なまでの高い繁殖能力を持つクリーチャーに手も足も出ず、半年で発展途上国は壊滅。

先進国の各国も、自国を必死に死守していた。

西暦2019年6月。

アメリカ・ロシア・ヨーロッパ・中国そして、日本を残し…世界の各国は全て壊滅的被害を受けていた。

国連は、対クリーチャー特殊戦術部隊【BASTAR】を設立。

イギリスへ本部を…そして日本へはその支部を設立した。

それと同時期、対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】の開発を開始。

西暦2020年4月…。

対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】が完成。

クリーチャー迎撃の最前線基地である日本のBASTAR支部【グ
ラスハイム】へと移送した。

そして…クリーチャーへの反撃を開始すると、BASTAR本部【
Noa】は残存する各国へ声明を発表。

そして…現在。

西暦2020年10月…。

東京・渋谷駅前。

…ザンツ！

ポロポロのアスファルトに突き刺さる一振りの剣…。

クリーチャーの死骸が辺り一面に横たわっている中心に、一人の少
女が立っていた。

返り血を浴びた顔…そして、血のように真っ赤な衣を纏った少女の名は、【井上瑠奈】…。

瑠奈は剣の柄を掴むと…引き抜いて鞘に納め、バス停のベンチに座った。

「あの賑やかだった渋谷も、今やクリーチャーの巣窟か。」

ババババ…

瑠奈が空を見上げると、輸送ヘリがゆっくり降りてきた。

「お迎えが来たみたいね…帰りましょうか。」

「…お疲れ様でした、井上隊長。」

ヘリから降りてきた隊員が、瑠奈に語りかける。

「お疲れ様。」

瑠奈は椅子に座ると剣を鞘から抜いて、刃の手入れを始めた。

「【赤き疾風】井上瑠奈。十八歳の若さで、日本支部で一番のクリーチャー掃討数を誇るエース。」

「ん?…」

瑠奈が顔を上げると、アメリカ人の少女が笑顔で立っていた。

「封魔の使い手に任命され、B A S T A R 第一戦闘部隊【 】の部隊長となったつ。」

「リイナ、お世辞は止めなさい。」

「はあい。」

リイナと呼ばれた少女は瑠奈の隣に座り、刀を見つめた。

「最初：対クリーチャー用白兵戦兵器って聞いて、どんなに凄い兵器かと思いきや。」

「見た目は普通の刀ですな。」

一般隊員が取っ手を掴んで、バランスを取りながら封魔を見つめた。

「封魔、調子はどう?」

瑠奈が語りかけると、封魔の柄にある宝玉が光り輝いた。

『非常に良好です。』

「そう。」

瑠奈は封魔を見つめ、初めて微笑んだ。

「先輩は本当凄いですよねえ?」

「何を言っているの。五歳でアインシュタインの方程式を解いたIQ250の奇才リイナ・カーディガル。貴女の方が凄いわ。」

「たまたまですっ、たまたま。」

瑠奈とリイナが会話していると、ヘリに通信が入った。

《こちら、BASTAR日本支部グラスハイム…どちらの部隊か？》

「こちら、クリーチャーの掃討に出ていた 部隊。ヘリポートへの着陸許可を。」

《了解。三番ヘリポートを利用して下さい。》

「着いたみたいですね？」

「そうね。」

瑠奈が窓から外を見ると、巨大なビルが立っていた。

旧サンシャインシティ及びその一帯を改築したBASTAR日本支部、通称【グラスハイム】のメインビルである。

「ようやく、一息つけるか…。」

「先輩？」

「ん？…なんでもないわ、それよりベルト締めなさい？着陸するわよ。」

「はあい…！」

へりがへりポートに着陸した後、瑠奈が降りるとリイナが追いかけてきた。

「先輩はこのまま、司令の所へ報告に向かいますよね？」

「ええ。」

「わかりました。先に、隊のオフィスへ戻ってます。」

「そうして？…うるさい馬鹿の相手、頼むわ？」

「了解ですっ！」

瑠奈はグラスハイムのメインビルに入ると、エレベーターで最上階に向かった。

瑠奈は顔をハンカチで拭きながら廊下を歩いていくと、支部長の部屋の脇にある司令官室の前で立ち止まった。

「部隊所属：井上瑠奈です。入ります。」

瑠奈が室内へ入ると…窓から外を眺めていた、中年のイギリス人男性が振り返った。

「瑠奈…帰ったか。」

「はっ、クリーチャーの掃討完了しました… balan・シュノーケル司令官。」

「ふっ…相変わらず、真面目だな？」

balan と呼ばれた男は瑠奈に振り返ると、彼女の顔を見つめ微笑んだ。

「だいぶ返り血で汚れたな？…その綺麗な顔が台無しだ。」

「構いません…容姿など気にしては、戦いは出来ませんから。」

「そうか…。」

balan はソファアに座ると、瑠奈を向かい側に座らせて目の前のテーブルに書類を置いた。

「これは…？」

「次の作戦に関してだ。」

「…。」

「帰還してすぐに申し訳ないが、今度は京都へ向かってほしい。」

「京都…？」

瑠奈は書類を手に取り、目を通した。

「京都祇園のクリーチャー掃討作戦…。」

「そうだ。現在の自衛隊は今までの激戦で疲弊しており、部隊の再編成に集中させてやりたいのだ。」

「それまでの時間稼ぎ…ですか。」

「自衛隊の再編が完了すれば、戦いもだいぶ楽になる。それまでは、何とか我々だけで頑張るしかないのだ。」

「了解しました。では、13:30時にグラスハイムを発ちます。」

「すまんが、よろしく頼む。」

瑠奈が立ち上がり、部屋を出ようとした時…バランスが語りかけた。

「…瑠奈。」

「はい。」

「帰って来た時くらい、肩の力を抜いてはどうだ？」

「…抜いています。」

そう呟くと…瑠奈は静かに部屋を去った。

「感情を殺し、クリーチャーへの復讐に燃える戦鬼か。」

バランスはソファーに寄りかかると、ジツと天井を見つめた。

「…無理もないわい。あんな事件があれば、誰しもああなるう。」

バランスが振り向くと、日本人の老人が歩いてきた。

「黒田健一郎支部長…。」

「瑠奈はクリーチャーの日本侵攻時、激戦区だった千葉に住んでお
った。」

「あの事件が無ければ…彼女が人間としての感情を失う事もなかっ
たらうに。」

「うむ、可哀想な娘じゃて…。」

エレベーターで降りる瑠奈。

『瑠奈、体力回復を優先しましょう。』

「ええ、ちよつと疲れた。」

瑠奈はエレベーターを降りると、更衣室へ向かい…着物を脱いで、
シャワーを浴びる事にした。シャワーを浴びた瑠奈が髪を乾かして
いると…一人の女性隊員が歩いて来た。

「あら、まだ生きてたの？」

「…それは、こっちの台詞。」

微笑みながら俯く女性隊員。

「相変わらずね。ま、無事で良かったわ？」

「当たり前。」

瑠奈はバスタオルを彼女に被せ、自分のロッカーに向かった。

「全く…少しは愛想良くできない〜?」

「私なりにしてるつもりよ…。」

苦笑いしながら歩み寄ると、女性隊員は瑠奈の頭にバスタオルを被せた。

「仕方ない娘ね?…そんなんじゃ、男も寄ってこないわよ?」

「恋愛なんか…興味ない。」

瑠奈はB A S T A Rの制服に着替えると、着物と帯を手に持って口ツカーを閉めた。

「感情や思いだけじゃ…誰も救えやしない。」

「瑠奈…。」

「私は…力が欲しい。クリーチャーを皆殺しにする力が…。」

「…。」

「…じゃあ、失礼するわ。」

「瑠奈っ!」

女性隊員が去ろうとした瑠奈を呼び止めると、歩み寄った。

「…何?」

「貴女は一人じゃない…それだけは、分かって。」

「…。」

瑠奈は俯くと…振り返って静かに去っていった。

「シグナル隊長。」

女性隊員に他の隊員が話しかける。

「何？」

「井上隊長って、愛想ないですよねぇ？」

シグナルと呼ばれたその女性隊員は、彼女の発言を聞くと静かに俯いた。

「事の詳細を知らない貴女達には、そう見えても仕方ないか。」

「シグナル隊長？」

「なんでもないわ？気にしないで。」

「は…はあ…。」

女性隊員達が首を傾げるなか、シグナルもまた更衣室を後にした。

『瑠奈。』

「何？封魔。」

「隊オフィス内から少量の火薬を確認しました。恐らく…。」

「はあ…また、あの馬鹿か。」

瑠奈が頭をかきながらオフィスに入ると…イヤホンを付けたアメリカ人の男性隊員が、椅子に座りながら机上へ足を置き…何かの曲を聴いていた。

「フンフン！オツ、イエ…イ!？」

男性隊員の首元に、封魔の刃が不気味に光る。

「この前、オフィス内で武器の解体はするな…と言った筈よね、レオン？」

「る、瑠奈…！ちょっと！わ…忘れてたわけじゃ。」

「レオン・ハイフォード上級戦闘員…上官をファーストネームで呼ぶの？」

「ひいっ！井上隊長、ごめんなさいっ！」

「分かれば良いの。」

封魔を鞘に戻すと、瑠奈は隊長席へ座った。リイナが笑顔で席を立ててカップにコーヒーを注ぐなか、瑠奈は次の作戦の説明を始めた。

「全員…13:30時になったら、ヘリポート入口に集合。」

「もう次の任務ですか？先輩。」

「ええ。」

「今度はどちらに？」

「京都へ向かう。」

「京都？」

「そう…自衛隊再編の時間稼ぎも兼ねた、クリーチャー討伐作戦よ。」

「先輩…ひとまずコーヒーでも飲んで、ゆっくりして下さい？」

「ありがとう、リイナ。」

リイナが瑠奈へコーヒーを手渡すと、レオンが羨ましそうに見ていた。

「リイナちゃんっ、俺のは？」

「自分でやってっ！」

「ちえっ！…ん？そういや、あのぜい肉君はどうした？」

レオンが室内を見渡すと、リイナが答えた。

「ウィン・リイ下級戦闘員？そういえば、私も見てない。」

「まったくよお！大事なミーティングの時間にどこ行ってんだあ？あいつ。」

「その【大事なミーティングの時間】に、机の上へ卑猥な本を広げてるのは、何処のどなたかしら？」

「あつ！やべつ！」

コーヒを飲みながら瑠奈が呟くと、レオンは慌てて本を机の引き出しにしまった。

「思春期の学生じゃあるまいし……。」

リイナが呆れた口調で言いながら、冷たい視線をレオンに送る。

「あんまり酷いと、リイナの教育に悪いし……セクハラで訴えようかしら？」

「か、勘弁っ！」

「リイナ……ウインには、今話した件を伝えておいて？多分、ヘリポートでヘリの整備をしてくれてるんでしょう。」

「はいっ！」

「じゃ、時間はあまり無いから解散。昼休み後、ヘリポート入口に集合……良いわね？」

「了解ですっ。」

「へいへい。」

「…じゃあ、また後で。」

「じゃあ瑠奈、俺と一緒に飯を食いに…」

レオンが笑顔で食事を誘うも…瑠奈は完全に無視して、オフィスから出ていった。

「無視…。」

「当然！先輩があんたみたいなのと行くもんですかっ！」

「けっ！……リイナ、一緒に飯…。」

「断じて、行かないっ！！！」

宿舎の自室へ帰り、外の景色を眺める瑠奈。

『瑠奈。昼食摂取によるエネルギー回復を。』

「分かってる。」

ベッドの上に着物を投げて、部屋を出ようとした瑠奈は…ふと机にある写真を見つめた。

そこには…二人の友人と一緒に笑顔で写っている自分の姿があった。

「…佳苗。」写真立てを手に取り…懐かしそうに見つめる瑠奈。

「!?!」

その時…彼女の脳裏に、映像が浮かんだ。

高校の制服を赤く染めた瑠奈が腰を抜かして座り込む目の前で、友達たちがクリーチャーに追い詰められている。

「た、助けて…。」

「や…やめて。」

瑠奈は震えながら必死に懇願するも…クリーチャーは怯える友人に向かって、一斉に噛みついていった。

「うあああつ!?!」

「!?!だあつ!」

『瑠奈!?!』

瑠奈は自室の入口に頭を打ち、現実に戻ると…額から血が流れてきた。

『また…いつものですか?』

「くっ!?!大丈夫、行きましょう。」

瑠奈は額をハンカチで押さえると、止血しながら自室を去っていった。

「近頃、また頻繁にアレを見るようになった…何故？」

昼食後…。

ヘリポートに集まる 部隊のメンバー。

瑠奈も衣に着替えると封魔を腰に差し、ヘリポートへ向かった。

「…お！来た来た、我らが隊長さんが！」

肩に自動小銃を担ぎ、レオンが冷やかす。

「隊長っ！ヘリの整備で時間忘れてたッス！」

小太りの少年が慌てて瑠奈の前に立つや敬礼した。

「ウイン…次からは気をつけなさい。」

「はいッス！」

「リイナ、ヘリ内でブリーフィングをしたいんだけど。」

「そうだと思つて、先程…管制室のレイチエル管制官から作戦内容のデータをいただけてきました！」

「ありがとうございます…じゃあ、行きましようか。」

「了解ッス！」

ウインが走っていき、ヘリの運転席に座るとエンジンを起動させた。

プロペラが回り、風が吹き荒れる。

「行くわよ。」

瑠奈が衣をなびかせながら歩いていく。

「待ってください〜い!」

リイナも走って瑠奈の後についていく。

「へいへい…んじゃま、行きますかねっ!」

レオンも走って乗り込むと…ヘリの後部ハッチが閉まり、ゆっくり上昇していった。

西の京都へ向かって飛んでいくヘリの中…。

リイナが京都周辺の地図を広げ、自分のミニパソコンを立ち上げた。

「今回の作戦は、京都祇園に潜伏しているクリーチャーの排除です。」

「祇園かあ…観光で一度【ゲイシャ】ってのを見に、行ったことあるな。」

「レオン、黙りなさい…続けて。」

「ちえっ。」

「はい！クリーチャーは八坂神社から花見小路・新橋通など…広い範囲に分散しています。先輩とレオンは京都の上空へ到達次第降下…直ちに排除を開始して下さい。」「了解だ…おい、ぜい肉君っ！京都まで、あとどんくらいだ？」

「あと一時間ちよつとツス…それから、その呼び名は止めてほしいツス！」

「なんだよ？嫌なのか？」

レオンはウインの頭を後ろから掴むと、ニヤニヤしながら問いかけた。

「瑠奈さんの前で、ぜい肉ぜい肉って言ってほしくないんす！」

「ん？そついや、お前…瑠奈に気があんだっけ？」

「…呼んだ？」

レオンとウインの後ろへ、瑠奈が首を傾げながら歩み寄ると…ウインの顔が真っ赤になった。

「い、いえっ！！なんでもないツス！」

「…お前、絶対マゾツ気あんだろ。」

「ウイン、京都上空に到達次第…後部ハッチを開放して。」

「りよ…了解ツス！」

「レオン？作戦前よ…ふざけてないで、集中。」

「へえへえ！」

へりが西へ向かう事、一時間…。

「うん…先輩、京都上空へ間もなく到達します！」

「了解…アシスト頼むわ？」

「お任せ下さいっ！」

「んっ…行くわよ？封魔。」

瑠奈が語りかけると、封魔の柄にある宝玉が光り輝いた。

『全システムのチェック完了。問題ありません。』

「了解。」

瑠奈はパラシュートを背負い、後部ハッチから飛び降りると…地上へ一直線に降下していった。

「隊長さんってば、張り切っちゃってよお？」

「レオン、後続！ぐぐだくだ言わないっ！」

「あいよ。じゃあ…行ってきますかねえっ！」

レオンも後部ハッチから飛び降りると…リイナとウィンが乗ってい

るへりは、ハッチを閉めて京都上空をゆっくり旋回し始めた。

「クリーチャー・リーダーCR、オンつと…先輩、無線聞こえますかっ！」

降下中の瑠奈にリイナが無線を飛ばす。

「…聞こえてるわ。」

パラシュートを開いてゆっくり降下していた瑠奈は、付けていたイヤホンマイクでリイナに返事をした。

《先輩の真下…二時の方向に、クリーチャー反応が三体あります。》

「了解。」

《瑠奈。離れて降下すんのか？》

「…あなたには、近くにいてほしくないからね。」

《ひ、ひでえ…。》

《あははっ！…では、御武運をつ！》

瑠奈は八坂神社の境内前に降下すると、パラシュートを外した。

「レオン…あなたは花見小路方面からクリーチャーを排除しつつ、こちらに向かいなさい。」

《あゝいよっ！》

「…何、ふて腐れてるのよ。」

首を傾げると、瑠奈はゆっくり歩きだした。瑠奈が参道を歩いていくと…辺りに風が吹き出し、境内周辺の木々が風になびいた。

「…。」

鞘に手をやり、親指で封魔を押し出す瑠奈。

「…グアアアツ！」

すると…木の上から現れた一体のクリーチャーが、瑠奈へ襲い掛かった。

「…はっ！」

瑠奈が抜刀斬りで飛び掛かってきたクリーチャーを両断すると…目の前の鳥居の先にある階段から、二体のクリーチャーが涎を垂らしながら歩いてきた。

「クリーチャーは…。」

風に髪をなびかせながら、封魔を横に振って静かに握り直す瑠奈…。

「…皆殺しだ。」

瑠奈が封魔を握って呟くと…クリーチャーは彼女へ一斉に襲い掛かった。

「はぁぁー！」

瑠奈が封魔を勢いよく振るった瞬間…木々に隠れていたカラスの群れが、鳴きながら一斉に飛び立った。

カア！カア！

カラスの鳴き声が響くなか…無惨に転がるクリーチャーの死骸。

刃についた血を払い落とし…瑠奈は封魔を鞘に納めると、参道を再び歩いていった。

「ん？」

瑠奈がふと空を見上げると…ポツポツと雨が降りだした。

「雨か…ん？」

瑠奈は道沿いに壊れた売店を見つけると、歩いて行って和傘を手にとった。

「すみません…傘を一本、お借りします。」

瑠奈は壊れた売店に頭を下げ、和傘を開くと…八坂神社を後にした。

「封魔、クリーチャー反応は？」

『現在、周囲に反応はありません。引き続き、警戒します。』

「お願い。」

瑠奈は雨の中、和傘をさして歩いていくと…遠くで銃撃音が聞こえた。

「あの音…今日は、まともに仕事しているみたいね。」

「…ぬわあっ!」

瑠奈が振り向くと…レオンが血相を変えて、路地から走って来た。

「レオンッ!？」

「瑠奈っ!」

レオンが瑠奈を見て、笑顔で叫ぶと…背後から二体のクリーチャーが彼目掛け飛び掛かった。

「!…レオン、しゃがみなさい!」

「はっ!？わ…分かったっ!」

レオンの背中に飛び乗り、封魔を抜く瑠奈。

「うおっ!…ん？こりゃあ。」

「今、上を見たら…あんたの大切なとこ、切り刻むわよ。」

「け、決して見ません…。」

「はああっ!」

瑠奈はレオンを踏み台にして飛び上がると…一体のクリーチャーの顔面に蹴りを放った後、もう一体のクリーチャーへ廻し蹴りを放った。瑠奈は着地すると間髪入れず、落下したクリーチャーへ走っていった。

「はあっ！」

横払い…斬り下ろしと二体のクリーチャーを両断する瑠奈。

「レオン、あと何体？」

「はあ？」

「あんたが逃げてきた時に追ってきたクリーチャーは、あと何体？」

「あ、ああ…八匹いやがって、内二匹は撃ち殺したから…。」

「今、二体倒したから…残るは四体か。」

痙攣しているクリーチャーの頭を踏み潰すと…瑠奈は封魔を払って血を落とし、鞘に刃を納めた。

「和傘…。」

先程、八坂神社で拝借した和傘をさして歩いていく瑠奈。

「瑠奈っ！」

「レオン…あんたは、この場で待機。」

「た、待機だあ！？冗談じゃねえ！俺はまだやれ…！？」

レオンが叫ぶなか、瑠奈はゆっくり振り返ると…彼の自動小銃を指差した。

「クリーチャーにやられて使えないんでしょう？それ…。」

「うっ…。」

「大丈夫よ…あとは、私がやるわ。」

瑠奈がそう告げて去っていくと…レオンは苦笑いしながら、頭を掻いた。

「参ったな…全てお見通しかよっ。」

一人、新橋通りを歩いていく瑠奈。

「…。」

そんな彼女を追うように…クリーチャーの影が気配を殺して、彼女の背後から近づいていた。

「…来た。」

立ち止まり…瑠奈は傘を上へ放り投げると同時に廻し蹴りを放つと、背後から走ってきたクリーチャーの顔面に命中して雨で濡れた地面を滑っていった。

「グアアッ！」

家屋の壁を突き破って襲いかかるクリーチャーに、封魔の鞘で殴りかかる瑠奈。

『瑠奈、屋根から二体。』

「!...はああっ!」

クリーチャーを殴りつけた格好のまま…瑠奈は鞘から封魔を抜いて、抜刀斬りを放った。

「はあ!」

抜刀斬りで一体を両断するも、もう一体の爪が瑠奈に迫る。

「!...くっ。」

バンツ!

瑠奈が目を閉じた瞬間…クリーチャーは、こめかみを撃ち抜かれて地面に倒れた。

「!?!」

「瑠奈っ!大丈夫か!」

鞘で殴りつけたクリーチャーを両断した後、封魔を払った瑠奈へレオンが駆け寄った。

「レオン、あんた...。」

「こちとら、元・軍人だ。小銃がやられた時の準備くれえしてるぜつ。」

拳銃を構えてレオンが笑う。

「ふっ…借り、作っちゃったわね。」

「よりもよって、俺に…てか？」

「ん？…そうね。」

瑠奈は微かに微笑むと、レオンは苦笑いを浮かべた。レオンが後ろに振り返って拳銃を連射すると、頭と胸に弾を数発浴びてクリーチャーが倒れた。

「あと…。」

「…一体。」

瑠奈は血に染まった封魔を払い、クリーチャーと睨みあった。

雨が封魔と瑠奈を濡らす…。

「グアアアアッ！」

走ってくるクリーチャーに対し…身構えず、そのままの態勢で待つ瑠奈。

「…はっ！」

瑠奈はすれ違いざまに封魔を振り下ろすと…クリーチャーは斜めに
両断され、真っ二つになった。

「終わりか…。」

「この辺りは、ね…リイナ！」

《はい、先輩！》

上空で旋回中のヘリにいるリイナへ、通信を送る瑠奈。

「八坂神社に着陸出来る？封魔のエネルギー補充と…私の隣にいる
馬鹿へ、予備の自動小銃を。」

「瑠奈…。」

《了解しました。》

「サンキユ。」

「あんたも一応…隊の戦力だから。」

「そうかい。」

レオンは微笑むと和傘をさして…雨で濡れた瑠奈に歩み寄った。

「濡れちゃったし…もう必要ない。」

「そう言うなって。俺達の大事な隊長様に、風邪などひかれては困

りますっ。」

「ふっ…お調子者。」

瑠奈はレオンにそう呟くと…苦笑いしながら傘に入っ、一緒に歩いていった。

「もう少し愛想が良けりゃあモテるだろうによぉ？」

「あんたに言われたくない…。」

「か、可愛くねえ…。」

「…。」

「ん？もう来てんのか。」

「みたいね…。」

瑠奈とレオンの二人が八坂神社に到着すると…既に着陸していたへりからリイナが顔を出した。

「先輩〜！」

「…リイナ。」

「ふふふ、お二人共〜！雨、もう上がってますよ〜！」

「ん？…おっ、マジだ。」

レオンが空を見上げると、雨雲の隙間から綺麗な青空が覗いていた。

「じゃあ、傘をさす必要は無くなったわね？…レオン、あのお店に返ってきて。」

「へえへえ！」

苦笑いしながら壊れた売店へ走っていくレオンを、笑顔で見つめる
瑠奈。

「リイナ、へリを出すわよ。」

「了解ですっ。」

「！…ちよっ、おいてく気がよっ！おいっ！」

慌てて走ってくるレオンを尻目に、瑠奈は笑っているリイナと共に
へりへ乗り込んだ。

井上瑠奈

飛行中のヘリ内にて…リイナが簡易点検装置を使い、封魔のメンテナンスを始めた。

「レオン、あなたは周囲の警戒。」

「了解。」

「ウインは、グラスハイムが近づいてきたら教えて。」

「了解ッス！」

封魔が収納されている簡易点検装置のキーボードを、リイナは慣れた手つきで操作し…装置を起動させた。

瑠奈はリイナの後ろで、腕組みをしながら立っている。

「…どう？」

「エネルギー補充はすぐに済みますが…ちょっと整備が必要みたいです。」

リイナがモニターを指差した。

「回路の一部に異常を見つけました。グラスハイムでしっかり見た方が良さそうです。」

「そう…分かったわ。」

へりが東京に向かい…プロペラを勢いよく回転させながら飛んでいく。

「よういっしょっと！」

レオンは椅子に座るともたれ掛かって、背伸びをした。

瑠奈も椅子に座ると、封魔を点検中のリイナに話しかけた。

「リイナ。」

「はい？」

「グラスハイムに着くまで仮眠をとるわ…着いたら起こしてくれる？」

「了解しましたっ、ごゆっくり。」

瑠奈は脚を組むと、静かに目を閉じた。

そんな瑠奈を見つめながら…レオンは静かに、リイナの所へ向かった。

「寝顔だけ見るとよお…普通の女の子なんだけどなあ？」

「だよな？…けど、【あの事件】以降…先輩はああなっちゃったの。」

「あの事件？」

「レオン、知らないんだ…。」

「ん？」

「先輩…クリーチャーが日本へ攻めてきた時、目の前で友達を殺されたの。」

「なっ！…マジかよ？」

リイナはモニターを睨みながら頷いた。

「うん…目の前で友達がクリーチャーに噛み殺された後、体をバラバラにされたらしいよ…。」

「よく助かったな？…あいつ。」

「先輩が襲われた時…たまたま近くで戦闘していたバラン司令が見つけて助けたらしいの。でも、それ以来…先輩の心は閉ざされたまま。」

「そうか…。」

レオンとリイナは眠っている瑠奈を見つめ…黙り込んだ。

「先輩は…親しい友達を守れなかった罪に苛まれてるんじゃないかな。だから、誰とも仲良くしないんだと思う…失うのが怖いから。」

「けど…俺にゃあ、ただの現実逃避にしかみえねえぜ？」

「レオン…世の中には、貴方みたいに心の強い人間ばかりいるわけじゃない…。」

「…まあ、な。」

「…。」

夕暮れ時となり…へりは明かりの見えない地上を見下ろしながら、東へと飛んでいった。

暫くすると…街の輝きが見えてきた。

「グラスハイムまで、あと少しか。」

「先輩、起こしてくる。」

「ああ。ぜい肉君、安全運転で頼むぜっ?」

「その呼び名、嫌いッス!」

三人が話しをしているなか…瑠奈は脂汗をかきながら、うなされていた。

「うう…。」

「助けてって言ったのに…。」

「か、佳苗…。」

「見殺しにするなんて…。」

「見殺し…なんか。」

暗闇の中…血みどろになった親友の佳苗が、瑠奈にゆっくり歩み寄ってくる。

「なんで、助けられなかったの？あんなだけのうのと生きて…恨めしい。」

「ち、違う…私だって…私だって、佳苗を助けたかった！」

佳苗は瑠奈の肩を掴むと…耳元で囁いた。

「この…人殺しっ！」

「！…ち、違うっ！！私は人殺しなんかじゃないっ！」

「…きゃあっ！」

瑠奈が叫びながら飛び起きると…リイナは驚いて、尻餅をついた。

「はあ…はあ…ご、ごめんなさい？リイナ。」

「せ、先輩…大丈夫ですか？だいぶ、うなされてましたけど…。」

「平気…それより、もうグラスハイム？」

「はい。」

「了解、ありがとう。」

瑠奈は外を眺めると…グラスハイムのメインビルがライトで照らされていた。

「ワイン、着陸態勢。」

「了解ッス！」

瑠奈がワインに指示をすると、レオンが心配そうな表情で歩いてきた。

「瑠奈…本当に大丈夫か？」

「レオン？…大丈夫って、言っているでしょう。」

瑠奈は俯くと悲しい眼差しをしていた。

グラスハイムのヘリポートで、誘導員がヘリに合図を送る。

「…よし！着陸したッス。」

「お疲れ様…皆、次の命令があるまで待機。」

「先輩、封魔を。」

リイナから封魔を受け取ると、瑠奈は腰に差した。

「ありがとう…私は研究室に行くわ。何かあったら、携帯か研究室に連絡を。」

「了解！」

瑠奈はヘリポートを後にすると、グラスハイムのメインビル内にあるエレベーターで…地下の研究区画へ向かった。

瑠奈はエレベーターを降り、通路を歩いていくと…研究室前へやって来た。

「失礼します。」

「ん？瑠奈じゃないの…元気そうで何よりね。」

瑠奈が室内に入ると、白衣を着た三十代の女性が優しく微笑んで迎えてくれた。彼女の名は、和田玲子。

グラスハイム研究室の研究室長を務めており、封魔のメンテナンスも担当している。

「和田教授…封魔のメンテナンス、良いですか？」

「構わないわ？座ってなさい。」

「はい。」

和田教授に封魔を手渡すと、瑠奈は近くにあったソファアームに座った。

「瑠奈？シグナル隊長が心配していたわよ。」

「また…ですか。」

呆れた表情で俯く瑠奈を見て、和田教授は苦笑いしながら話しを続けた。

「歳も近いし、心配なのよ？お姉さま肌だしね。」

「私には、お高いお嬢様のようにしか見えません…。」

「ふふふっ、またすぐそういう意地悪をつ…ん？なるほど…エネルギー供給回路に異常か…リイナちゃん、さすがね？」

「リイナ、ですか？」

瑠奈がキョトンとしながら問いかけると、和田教授はパソコンのモニターを見つめながら頷いた。

「前以て連絡があつたのよ…封魔の回路に異常を発見したって。」

「そうでしたか。」

「リイナちゃん…貴女を姉のように慕ってるみたいだし、優しくしてやりなさいね？」

「…努力します。」

「失礼しますわ？」

和田教授が瑠奈に微笑んでいると、研究室へ用事があつたのか…シグナルが入ってきた。

「シグナルっ、瑠奈も来ているわよ？」

「あ、瑠奈っ。」

「…。」

ジッと、シグナルを見つめる瑠奈。

「どうしたの？何かあった？」

「な…何でもない。」

「ふふふ、恥ずかしいのよ。」

「ち、違いますっ…！」

赤面しながら慌てる瑠奈を見て、シグナルは優しく微笑んだ。

「良かった、無事で…心配してたんだから。」

「あ、ありがとう。」

「えっ…。」

「あらっ。」

笑顔で見つめ合うシグナルと和田教授を見て、瑠奈は首を傾げた。

「？…和田教授、何か。」

「何でもないわ…ねえ？」

「ええっ！」

「な…何なんですっ？わ、私だってお礼くらい言います。」

「ふふふっ！」

「瑠奈！今、一階にある喫茶店のケーキが女性隊員の中で評判なの！一緒に食べ行かない？」

「ケーキ？…わ、私はちょっと。」

「行ってきなさいな？封魔のメンテナンスは、まだ時間かかるから。」

「は…はあ…。」

「瑠奈っ、早く早く！」

「ちよっ…ちよっと！シグナル、手…引っ張らないで！」

シグナルが嬉しそうに笑いながら瑠奈の手を掴み、走って研究室を出ていった。和田教授はそんな二人を見て微笑むと、再びパソコンのモニターを見つめた。

「やれやれ…瑠奈も、もう少し心を開いてくれれば良いんだけど。」

教授がキーボードを操作していると、モニターを見て…眉をピクッと動かした。

「何？…このシークレットは。」

和田教授は突如画面上に現れたデータを調べていくと…0と1の数式が画面一杯に現れた後に、見たこともない景色や見知らぬ人物が次々にモニターへ映し出された。

「な…何なの。」

慌ててキーボードを操作する和田教授。

「操作不能？…な、何が起きているの。」

暫くすると…画面は光りを放ち、一人の女性が画面上に姿を現した。

「だ、誰…。」

教授はモニターの女性を見つめ…啞然としていた。

《あまのめがみ天之女神…それは、日本神話に語られる事がなかった幻の女神。》

「天之女神？…封魔にはまだまだ沢山の謎がありそうね？…え？」

頷いていた教授がふとモニターを見ると…画面上には【井上瑠奈】と、瑠奈の名が表示されていた。

「瑠奈？そういえば…どうして当時BASTARに入隊していなかった彼女を、封魔が使い手に選んだのか…そこから謎を解いていかなくってはならないみたいね。」

和田教授が腕組みをして考え始めた頃…瑠奈はシグナルに連れられ、一階にある喫茶店の前でメニューを見つめていた。

「瑠奈、これよこれ！」

「?…このケーキが？」

「そう！女性隊員の中で噂になってるのよ！」

「よく…わからない。」

瑠奈が俯くと苦笑いするシグナルの後ろへ、雑用を終えたリイナが笑顔で歩み寄った。

「シグナル隊長つ…あ、先輩も！珍しいですねっ？」

「リイナ、あなたもケーキ目当て？」

「はいっ、先輩達もですか？」

「!…そうなの、一緒に食べましょ？奢るわよっ。」

「えっ、本当ですかっ！じゃあ…ご一緒させていただきま〜す！」

喜ぶリイナを見ながら、シグナルは笑顔で振り返った。

「瑠奈…もう逃げられないわよ？」

「はあ…もう、好きにして。」

溜め息をついた瑠奈を見て、シグナルとリイナは笑顔でハイタッチした。

「ん？…あ！さては、最初から仕組んでいたのねっ！？」

「まあまあ！」

「先輩、とにかく入りましょう！」

「ちよっ…リイナ！？シグナルまで！」

シグナルとリイナに両脇から腕を組まれ、無理矢理喫茶店へ連れ込まれる瑠奈だった。一方…和田教授は、封魔の宝玉から直接データをパソコンへ移す作業を行っていた。

「対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】…製造元、国連特殊兵器開発局。設計・開発責任者…！…アリナ・イノウエ！？」

和田玲子教授がパソコンのモニターを見て驚き、思わず立ち上がった。

「瑠奈の…母親だったの？亜里奈…。」

《井上亜里奈…彼女に封魔を任せるわけにはいかない。》

「また…。」

和田教授は画面上に再び現れた女性を、ジッと見つめた。

「貴女は…誰なの。」

《そんな事より、封魔の能力向上及び機能を説明します…。》

画面上の女性がそう和田教授へ告げると画面が切り替わり…封魔の
図面が現れた。

「封魔の可変機能？…太刀型可変形態【正宗】に薙刀型可変形態【
青龍】、大剣型可変形態【あまのむらくも天村雲】の…全3種へ変形が可能。」

教授は目を閉じて考えると…暫くして、ゆっくり瞳を開いた。

「これを知れば…国連やB A S T A R本部No aの研究機関は、き
つと封魔のデータを欲しがらね。だけど…。」

キーボードに手を伸ばす教授。

「瑠奈の身に危険を及ぼしたくないわ…あの娘の身を守るには。」

和田教授が呟いていると…封魔の宝玉が淡い光りを放ち始めた。

「？…封魔…。」

『瑠奈は…私が守ります。』

「！…封魔！？」

喫茶店にいた瑠奈が慌てて立ち上がると、シグナルとリイナがキョ
トンとしながら瑠奈を見た。

「ど、どうしたの？急に。」

「美味しいですよ〜?」

「ごめん、封魔が…私を呼んでる。」

「え?」

「私を探してる…早く行かなきゃ!」

瑠奈が慌てて走っていくと、シグナルは立ち上がった彼女へ叫んだ。

「瑠奈! ちょっと、このケーキはっ!?!」

「あげるっ!」

「あ、あげるって…。」

「じゃあ、私が〜!」

瑠奈のケーキにフォークを伸ばすリイナ。

すると、シグナルも自分のフォークを瑠奈のケーキへ伸ばした。

「むっ!」

「んっ!」

二人がケーキを間に挟んで睨み合っているなか…瑠奈はエレベーターから飛び出るや、研究室に慌てて駆け込んだ。

「…教授っ！」

「瑠奈っ！…どうしたのっ？血相変えて！」

息を切らす瑠奈に、慌てて駆け寄る和田教授。

「ふ、封魔が…私を呼んでいる気がする。」

『瑠奈。』

「封魔！」

瑠奈はメンテナンス機器から取り出された封魔を手にとると、力一杯抱きしめた。

「封魔…教授によく診てもらった？」

『はい。いつでも戦闘可能です。』

「良かった…。」

瑠奈が封魔を見て、微笑んでいると…和田教授が白衣のポケットに手を入れて歩み寄った。

「封魔をちょっとだけ、バージョンアップさせてあるわ？」

「バージョンアップ？」

瑠奈が振り返って問いかけると、和田教授は苦笑いしながら頷いた。

「そっつ。まあ…正確に言うと、封魔が自分でバージョンアップし

「ただけど。」

「!…封魔が？」

「私も驚いているわ?…意思を持ち、使い手と共に成長する武器なんて。本当にNoaで開発されたのかしら?…明らかにオーバーテクノロジーよ。」

「封魔…。」

瑠奈は封魔を見つめ、黙り込むと…和田教授に頷いた。

「大丈夫です。私は封魔を…信じているから。」

「瑠奈…。」

和田教授は微笑むと、封魔の宝玉が光り輝いた。

『瑠奈?…真面目な会話をしているなか、恐縮なのですが。』

「何?…遠慮なんて、封魔らしくない。」

『…口に、クリームがついています。』

「えっ!?!…あ、これはその…慌ててたからよっ。」

赤面しながら口を拭く瑠奈を見て、和田教授は思わず笑みを溢した。

「ふふふっ!息もあってるし、心配ないかしらね?」

「え…はい、頑張ります。」

瑠奈は右手に握る封魔を見つめ…優しく微笑むと、そんな瑠奈の笑顔に心えるように封魔の宝玉は光り輝いていた。

冷めた心

その夜…。

真つ暗な東京上空を、BASTAR所属のヘリコプターがパトロールしていた。

日本政府は首都東京のみならず周辺都市へ、クリーチャーの襲撃から一般市民を守るという意味合いも兼ね…深夜の外出を老若男女問わず禁止する戒厳令を発令していた。

そんな無人と化した東京の空を、BASTARのヘリが飛んでいく。

「今日も異常無しか…。」

「暗くて良く分からん…もう少し高度を下げてくれ。」

「大丈夫か…?」

「この一帯はビル群しかない…住宅街じゃないから平気だ。」

「分かった。」

ヘリは旋回すると、高度を下げて街中へ向かった。

副操縦席の隊員が照明を操作し、真つ暗な車道や歩道を照らしていく。

街灯がところどころ点いてはいるもの…周囲のオフィスビルには

誰も残っておらず、人影は何処にも見当たらなかった。

「クリーチャーの姿はない…か。」

操縦席の隊員がそう呟いた瞬間だった。

道を照らしていた街灯が一斉に消え…へりの周囲が突然真っ暗になったのだ。

「なっ!?!」

「お、おいっ!ま、前だっ!」

副操縦席の隊員が正面にあるビルを見て、慌てて叫ぶ。

「だ、駄目だ!避けきれな…!」

「う…うわああっ!」

ビルに激突し、大爆発するB A S T A Rのへり。

燃えながら破片を撒き散らし落下するへりの遙か後方では…車道にあるマンホールの蓋が開き、そこからクリーチャーが赤い目を光らせていた。

翌日…。

へりの墜落事故現場に、瑠奈達… 部隊の姿があった。

「あっちゃあ!ひでえ有り様だぜ。」

レオンがヘリの残骸を見ていると、リイナが鑑識班を集合させた。

「鑑識班はまず、墜落したヘリの調査をお願いします。」

「了解です。」

鑑識班の隊員達が墜落したヘリの周辺に、立ち入り禁止のテープを張っていく。

瑠奈はウインを連れ、現場を見て回っていた。

「墜落ツスか…いつ見ても嫌な風景ツスね。」

「そつね。」

「先輩。」

「リイナ、何か分かった？」

「管制室のレイチエル管制官から、ある情報が。ヘリがレーダーからロストした時間と全くの同時刻に、この地域一帯で原因不明の電圧上昇を確認したとの事です。」

「電圧上昇…？」

「はい。調べてみたところ…周囲にある信号機の端末や街灯の一部が、急激な電圧上昇により被害を受けていました。」

「よくシヨートとかで、火事にならなかったツスね？」

「私も…そこが引つかかっているの。」

ウィンとリイナがそう話すなか…瑠奈は辺りを見回した。

「どうやら…ただの墜落事故で済みそうにないわね？…封魔、周辺のエリアにクリチャーがないか、サーチしてくれる？」

『了解。周辺15km圏内をサーチします。』

「そこまで広くなくていいわ。索敵範囲は…そうね？10km圏内で。」

『了解しました。調査範囲を10kmに修正…サーチ開始。』

瑠奈は封魔を見て頷くと、腰に手を置いて周囲を見回した。

「周りはオフィスビルばかり。身を隠そうと思えば、簡単に出来るわけか…。」

『周囲5km、クリチャー反応無し。』

「もうこの辺りにはいないか…。」

「ん？…リイナさん、あれって地下鉄ツスか？」

「え？…ああつ、東京メトロ？東京都の地下を走ってる地下鉄なんだけど、今は朝から夕方までの運行になっちゃってるの。東京で働く人達の大事な交通手段だよ。」

「なるほど。下手にタクシー使うより安く済むツスからね？」

「そういう事っ！」

「…地下鉄…地下、か。」

『瑠奈。周囲10km圏内に、クリチャー反応はありません。』

「了解、封魔。ところで、封魔は地下までサーチ出来るかしら？」

『申し訳ありませんが、私の能力を以てしても地下をサーチする事は出来ません。それには更なるバージョンアップが必要です。』

「了解、ありがとうございます…リイナ！」

「はいっ！」

「鑑識班の警護は 部隊に任せる。私達は一旦、グラスハイムへ帰るわよ？」

「了解しました。」

リイナが敬礼すると…後ろからレオンが歩いてきた。

「瑠奈。」

「レオン？…何。」

「いやな？…車道にあるマンホールの蓋の一つによお？鋭利な爪が何かで引っ搔かれたような痕があんだ。」

「マンホール？」

「ああ、ついてきてくれ。」

レオンは瑠奈を車道の真ん中にあるマンホールの所へ連れていくと、その蓋を指差しながら振り向いた。

「これ、なんだけどな？」

瑠奈がしゃがんでマンホールを見てみると…確かに蓋の表面に引っ掻き傷がついていた。

「確かに変ね…。」

『瑠奈。そのマンホールの蓋から微弱のクリーチャー反応を感知。』

「!…という事は、地下からクリーチャーは姿を現れたのね。」

「だけどよ…クリーチャーがどうやってへりを墜落させたっつんだ？」

「それは分からないわ？だから一旦、グラスハイムへ帰るのよ。」

「帰ってどうすんだ？」

「クリーチャーが地下にいるのは分かった…あとは、奴等がどこに潜伏しているかを探らないといけないわ。」

「確かにこれ以上ここにおいても、何の収穫も無さそうだしな…仕方ねえか！」

「分かったら、さっさと撤収準備なさい…グラスハイムまでジョギングしたい?」

「そ…それは、勘弁っ!」

リイナを助手席に乗せ、ウィンが車体に【B A S T A R】と書かれた四輪駆動車を運転して来ると…瑠奈とレオンは車の後部座席に乗って、事故現場を後にした。

瑠奈達が乗った四輪駆動車はグラスハイムの敷地内へ入ると、メインビルの駐車場へ車を停めた。

「だからよお…へりはなんで墜落したんだ?」

車を降りるなり、レオンは皆に問いかけた。

「まだ鑑識班が調査してるじゃない。」

「そっツスよ。」

瑠奈達は 部隊のオフィスへ入ると、リイナが照明をつけた。

「眩しッス!」

「眩しい…か。」

ウィンという言葉聞き、瑠奈が考え始めるなか…レオンはリイナに問いかけた。

「俺は今、知りてえんだよ！」

「私だつて分からないの！ちょっと黙つてて！」

瑠奈は騒ぐレオンの後ろを通つてオフィスの角に行くと、そこにあつたブレーカー盤の扉を開けた。

「だからっ！…ん？」

「先輩？」

「…。」

バンツ！

瑠奈が目を閉じた状態でメイン・ブレーカーを切ると、オフィスの中が真つ暗になった。

「きゃっ！？」

「た、隊長！？いきなり何するんスカ！」

「瑠奈、お前何を…あでっ！」

レオンの叫び声が室内に響くと、瑠奈はブレーカーを入れてオフィスの照明を点灯させた。

「…分かつた？これが原因。」

瑠奈がレオンを指差すと…彼は涙目になりながら額を押さえて痛が

っていた。

その足元には、ボールペンが一本転がっている。

「な、何しやがんだっ！」

「…分からない？あのへりには、赤外線カメラが装備されてなかった。つまり…明かりの少ない街中を、あのへりはサーチライト一つだけで、警戒しながら飛行してたんじゃないかしら。」

「あっ、なるほど！」

「リイナは分かったようね？…そのペンはへりと見立てて、あんたに投げただけ。」

「俺はビルかよ…。」

「な…何がなんだか、さっぱりッス。」

「つまりっ！急激な電圧の上昇によって街灯の大半が破壊され、辺りの暗さに操縦者の目が慣れる前にビルへ自ら突っ込んでしまった…てわけですねっ。」

「そういう事。夜間飛行の際はへりにサーチライトを装備させると共に、操縦士は暗視ゴーグルを所持する事になっていた筈。それを忘れてちゃ、激突して当然よ。」

「なるほど…ん？…ちょ、ちょっと待てっ！？なら、さっき俺にペンを思いきり投げなくても説明出来たんじゃねえか？」

「あら…今更、気がついた？」

「か、可愛くねえ…ホント。」

「たははは。ですが…ヘリの墜落した原因が判明したとはいえ。」

「…地下に潜むクリーチャーを倒さないと、同じ事の繰り返しっスね。」

瑠奈は自分の席に着くと、机にあるパソコンの電源を入れた。

「もうそろそろか。」

「何がッス？」

「管制室からちょっと、ね。」

ピピッ！

「…きた。」

椅子に座ってパソコンを操作する瑠奈。

「先輩？何を…。」

「東京メトロの全地下鉄路線図を管制室のレイチェルから送ってもらったの…リイナ、今からそっちに転送するわ？」

「あ！…もしかして、クリーチャーが潜伏していそうな地域の特定と、次の行動パターン分析ですね？」

「リイナは理解力があってホントに助かるわ。頼むわね？」

「了解ですっ！」

「レオンとウインは出撃準備。」

「あいよっ！」

「了解ッス！」

リイナがパソコンと向かい合う。

「さあ…悪さをしたイケナイ子は、どこにいるのかなあ？」

リイナがキーボードを物凄い速度で操作していく。

「東京23区で地下鉄が密集する地域は結構ありますから、まずは範囲を絞らないと…。」

瑠奈はリイナの後ろに立ち、腕組みしながらモニターを見つめていた。

「どっ？」

「あとちょっと…。」

リイナがキーボードを操作していると…突然、彼女の手が止まった。

「…どうかした？」

「先輩、クリーチャーは電気を使うんですよね？東京都の何処かに…電力を極端に使用する、又はかつて大量に使用していた場所ってありますか？」

「ちよつと待つてね…。」

瑠奈が考えるなか…リイナは笑顔でパソコンのモニターを、彼女へ見せた。

「先輩…なら、この範囲内ではどうですか？」

リイナがパソコンのモニターに表示された、飯田橋から水道橋付近の地図を指差した。

「ん…それなら後樂園、かな。」

「コウラクエン？」

「ええ…ここよ。飯田橋と水道橋の中間ね…やや北寄りだけど。」

「その後樂園には、何があっただんですか？」

「【東京ドーム】というドーム球場があるわ？」

「！…そこですっ！その後樂園を中心に範囲を限定！」

瑠奈もリイナの肩に手を置いて、モニターを見つめる。

「へりが墜落したのは確か…。」

「あそこは御茶ノ水。その先の東京駅は昼間、大勢の人が行き来しているわ。」

「警戒してきつと奴等は行きませんね…ならっ！」

リイナがEnterキーを押すと、一本の路線が点滅した。

「出ましたっ！奴等は東京メトロ丸の内線を使用していると推測っ
！」

「次の襲撃予定は分かる？」

「ちよつと待つてくださいねっ？えつと…丸の内線を辿っていくと、重要施設があるのは……！」

瑠奈とリイナがモニターを見て、目を見開いた。

「！…一番可能性があるのは、そこみたいね。」

「はいつ。」

「よくやったわ、リイナ！さすがねっ！」

「いえいえ！じゃあ、ここからは…先輩達のお仕事です！」

「ええつ。」

瑠奈は微笑んでリイナの頭を撫でると…ハンガーに掛けていた衣を纏って、オフィスから出ていった。

「先輩！グラスハイムから、有線と無線でアシストします！」

「お願いっ！…レオン、ウィン！出撃するわよ！」

「待つてましたあっ！！」

「準備完了しているッス！」

「で…クリーチャーは次にどこ行くんだ？」

「霞ヶ関…国会議事堂よ。」

「！…日本の国家中枢を狙ってるんスか！？」

「うわっ！」

「な、何よ！？」

道行く人々が慌てて振り返るなか…日比谷通りを低空飛行で飛んでいく、一機のヘリがあった。

「メンテ、ぎりぎり間に合ってたぜ！」

「ウィン！」

「了解ッス！飛ばすッスよーっ！」

ヘリが猛スピードで皇居跡上空を通過していく。

「皇居跡…あとちょっとか。封魔、エネルギーを私の脚部に。」

『了解しました。封魔エネルギー、瑠奈の脚部に蓄積。』

「瑠奈！？何する気だ、おいっ！」

「ウィンツ！速度このまま！後部ハッチ、オープンツ！」

「へっ！？」

驚いて振り返ったウィンに、瑠奈が叫んだ。

「『へ？』じゃないっ！…出来る！？出来ないっ！？どっちっ！」

「りよ、了解ッス！」

瑠奈の怒声に圧倒され…ウィンが開閉スイッチを操作すると、ヘリの後部ハッチがゆっくり開いていった。

瑠奈はヘリの下を見て、車がないのを確かめると…レオンが苦笑いしながら問いかけた。

「ま、まさか瑠奈？お前…。」

「その…まさかよっ！」

「危ねえってっ！うおっ！」

レオンが慌てて手を伸ばすなか…瑠奈は猛スピードで飛行しているヘリから飛び降りると、土煙を上げながら踏ん張って勢いを殺した。

「に、人間技じゃねえな…。」

レオンが唾然としながら見つめるなか…瑠奈はゆっくり立ち上がった。

「ふう！さて、地下鉄は…。」

『前方にある日生劇場／＼帝国ホテルの地下に、丸の内線は走っています。』

封魔が宝玉を輝かせ説明すると、瑠奈は力強く頷いた。

「了解っ…ん？」

瑠奈が向かおうとした時、マンホールの蓋が開き…中からクリーチャーが次々に姿を現した。

「クリーチャー！…封魔っ！」

『了解。通常モードから戦闘モードへ移行します。』

瑠奈は飛び掛かってきたクリーチャーの顔面を殴ると、廻し蹴りで蹴り飛ばした。

「はぁあっ…！」

抜刀斬りで1体を両断し、後ろから迫って来た1体を斬り下ろして真っ二つにする。

「ぞろぞろとっ！」

クリーチャーが爪を光らせて斬りかかってくるも、瑠奈は鞘で弾いてクリーチャーの首を切り落とした。

「瑠奈。丸の内線の線路に沿って、およそ百体のクリーチャー反応を確認。」

「ひゃ、百体っ!?!?…きゃあっ！」

瑠奈はクリーチャーの蹴りを背中に食らって体勢を崩されるも、手を地面につき…横転して振り返った。

「こんな奴等に、苦労してる場合じゃない！」

瑠奈は再び斬りかかると…クリーチャーの爪をしゃがんでかわし、胴体を両断した。

「邪魔っ！」

瑠奈が物凄い勢いで倒していくと、クリーチャーが突然後退し始めた。

「!…逃げる？」

瑠奈が封魔を構えながら辺りを見渡していると…地面から突然クリーチャーらしき手が現れ、彼女の足を掴んだ。

「何っ…!!…うああっ!!！」

瑠奈は、足を掴む手から放たれた電撃をまともに食らうと…身体中から煙を上げて、四つん這いになった。

「くっ…に、逃がすわけにはいかないっ！」

瑠奈がふらつきながら何とか立ち上がると、足を掴んでいる手が帯電を始めた。

「!…うああっ!」

瑠奈の身体を電撃が走る。

「うあああっ!…ぐっ!こんのお!」

瑠奈は封魔を持ち換えて、アスファルトに突き刺すと…地面から出ていた手が地中へ逃げた。

「はあ!はあ!はあ!」

片膝について息を切らす瑠奈の前に、地面からクリーチャーが姿を現した。

両肩と額に角を生やしたクリーチャーは、瑠奈を見るや…片手に帯電し始めた。

「くっ…。」

「グアアアアア!」

クリーチャーが電撃を放つと、その電撃は一直線に瑠奈へ向かって

いった。

「…ふ、ふふふ。」

電撃が迫るなか…ニヤリツと微笑む瑠奈。

「待っていたのよ…お前が、地下から出てくるのをねえ！」

瑠奈は横へ飛び退き、紙一重で電撃をかわすと…封魔を握って、クリチャー目掛けて走りだした。

「はぁあっ！」

瑠奈が封魔で斬りかかると、クリチャーは両腕をクロスして身を防いだ。

キイン！

「…刃が通らないっ!？」

封魔を弾かれ…瑠奈が驚いていると、クリチャーの足元にヒビが入った。

「…道路がつ！」

地面が陥没すると、瑠奈はクリチャーと共に地下鉄の路線へ落下した。

「くっ…。」

瑠奈がゆっくり立ち上がると…暗闇の中から走ってきたクリーチャーが、彼女にラリアットをお見舞いしてそのまま壁に叩きつけた。

「うあっ！…ああっ！！」

顔を掴まれ、地面に叩きつけられる瑠奈。

ミシミシミシ…

クリーチャーが手に力を入れるにつれ…瑠奈の頭蓋骨から軋む音が響く。

「ああっ！！」

瑠奈はクリーチャーの腕を掴んで必死に外そうとするも、その人並み外れた握力の前に歯が立たない。

「ああっ！…うつく！」

瑠奈は封魔を手探りで探すと…右手に封魔の柄が当たった。

「見つけた！…だあっ！」

封魔が胸に突き刺さり、絶叫するクリーチャー！。

「たあっ！」

瑠奈が胸に突き刺さっている封魔の柄を思いっきり蹴ると…刃が背中まで貫通した。

「グアアアアッ!!」

「うう…。」

額を掴み、頭を左右に振る瑠奈。

「やってくれるじゃない…たまには手応えのある奴と戦いたかったし、ちよつど良いわ。」

瑠奈は胸に突き刺さっている封魔を一気に引き抜くと、後ろに飛び退いた。

「さあ…続けましょっつ!」

瑠奈が刃についた血を払って封魔を構えると…クリーチャーも帯電しながら、ゆっくり立ち上がった。

「たまたま電気を使えるようになったからって…凶に乗るなっ!」

「ガアッ!」

「あら…凶星で怒った?」

瑠奈がニヤリツと笑って封魔を横に構えると、クリーチャーが次々と電撃を放った。

「ふっ!」

瑠奈は電撃をかわしながら、クリーチャーの様子を伺っていた。

《先輩！リイナですっ！》

「リイナ、どうかした？」

《先程、霞ヶ関の各省庁付近にクリーチャーが出現！現着したレオンとウィン及び…シグナル隊長率いる 隊が交戦に入りましたっ！》

「！…始まった!？」

瑠奈は電撃を避けながら、イヤホンマイクを掴んで驚いた。

《先輩、今どちらに!？》

「私っ!？私は昨夜のへりを落としたクリーチャーと、痺れるデートの真っ最中っ!」

電撃をかわしながら、柱の影に隠れる瑠奈。

《だ、大丈夫ですかっ!？》

「ビリビリ、凄いわよ？」

《ぷっ…あははっ!》

「?…何？」

突然笑い始めたリイナに、瑠奈が首を傾げながら問いかけた。

《先輩も…たまには冗談を言っんですねっ。》

「冗談も言いたくなるわっ！…くっ！」

クリーチャーが封魔を弾いた豪腕で柱を殴ると、ミシミシと音をたてて倒れ始めた。

瑠奈は飛び退いて難を逃れるも…クリーチャーが追いかけてくるなり、彼女へ殴りかかった。

「ちっ！」

瑠奈は左足を後ろに引いて半身反らすと…拳をかわして、そのままクリーチャーに肉薄した。

「もらいつ！」

瑠奈は笑顔で呟き、封魔を勢いよく振るうと…クリーチャーの首が、地面にゆっくり落ちた。

「ふう…さて、私も急がないと。」

瑠奈が刃の血を払った封魔を鞘に戻すと、頭上を見上げた。

「地上には戻れない…このまま地下鉄の線路を歩いていくしかないわね。」

瑠奈は線路を歩いていくと…暫くして、背後から不気味な音が聞こえてきた。

「何？…緊急時、関東一円の路線は運行を中止する事になっている

等。」

瑠奈が無言のまま後ろを見つめていると…大きな影が線路の上を走って来た。

「…えっ!？」

瑠奈が絶句したのも無理はない…。

彼女の目の前に巨大な芋虫型クリーチャーがうねりながら走って来たのだ。

「じょ…冗談じゃないわっ!」

瑠奈は慌てて走りだすも、芋虫クリーチャーとの距離がみるみる縮まっていく。

「こっとなったら!」

瑠奈は振り返って芋虫型クリーチャーの鼻先に封魔を突き刺すと…クリーチャーの頭部を蹴って、その身体の上に乗った。

「うわ…足場最悪。」

「。ピギイイッ!」

「ん?…きゃあ!」

芋虫クリーチャーは地上へ飛び出ると、目の前に国会議事堂が見えてきた。

「速いつ！このままだと国会議事堂まですぐに……んっ！」

瑠奈は背後から飛んできた電撃を飛び越え、振り返ると……先程倒した筈の電撃を使うクリーチャーが、頭部を脇に抱えた姿で立っていた。

「まだ生きていたの……フラれたのがショックだったのかしら？」

瑠奈は封魔を身構え、踏ん張ろうとするも……弾力性のある芋虫クリーチャーの身体にめり込んだ。

「くっ……足場は悪いし、時間もない……どうするっ。」

瑠奈が考え込むと……封魔の宝玉がゆっくり光りを放ち始めた。

『……瑠奈。』

「……封魔？さっきから喋らないし、壊れたかと思ったわ？」

『あの程度の電撃ではビクともしません。』

「言っじゃないっ！封魔、フルパワーで各個撃破するわ……いいわね？」

『瑠奈、現状を考えると……第一可変形態【正宗】の使用を推奨します。』

「……正宗？」

『はい、私の能力の一つです。刀身が長くて太い太刀の姿に、形状を変化させます。』

「面白いじゃない…。」

瑠奈は封魔を横に払い、叫んだ。

「封魔っ！正宗、起動！」

『了解しました。【正宗】、起動します。』

封魔の宝玉に【正宗】と文字が表れると…刃が粒子レベルに分解され、太く長い刃に再構成されていく。

瑠奈は柄を伸ばし、勢いよく封魔を振りかぶると…刃の再構築が完了し、通常の封魔と比べて倍の長さになった。

『瑠奈、流華一閃のエネルギーチャージを始めます。』

「流華…一閃。」

『刃に蓄積したエネルギーを放ち、その真空波で敵を消し飛ばします。』

「分かった…封魔、お願いっ！」

『了解、エネルギーチャージ…スタート。』

瑠奈が振りかぶっている封魔の刃に赤いエネルギーが蓄積すると…刃がどんどん赤く染まっていった。

そんな瑠奈を睨みながら、クリーチャーも右手に電気を帯電し始めた。

「…封魔。」

『流華一閃…スタンバイ。』

「了解っ！はああ！」

「グアアアアア！」

クリーチャーが、凄まじい電撃を瑠奈目掛けて放つ。

『今ですっ！』

「はああっ！流華…一閃っ！！」

瑠奈が封魔を振るうと…赤い真空波が巨大な電撃を消し飛ばしながら、クリーチャーに迫っていった。

「ギアアアア！」

クリーチャーは赤い真空波をまともに浴びると、跡形もなく吹き飛んだ。

「流華・一閃…凄い威力ね。せせらぎを流れる華のごとく…美しく、そして儚い赤い刃…うん！素敵じゃない。」

瑠奈が微笑みながら言うと、封魔の宝玉が光り輝いた。

『瑠奈、まだ終わっていませんよ?』

「あ…そうね。この気味悪い芋虫クリーチャーも。」

瑠奈は封魔を頭上へ振り上げると、その刃に再びエネルギーが集まってきた。

「…黙らせなきゃいけないわねっ!」

瑠奈は勢い良く封魔を芋虫クリーチャーの背に突き刺すと、体の至るところから赤い光が放たれた。

「吹き飛ばえーっ!」

「ん?…うああ!」

国会議事堂の門番をしていた警察官が接近する芋虫クリーチャーを見て、慌てて逃げると…クリーチャーは全身から赤い光を放って、大爆発した。

「うわあ!」

警察官が腰を抜かして尻餅をついていると…飛散した芋虫クリーチャーの肉片がボロボロと落ちてくるなかを、瑠奈が封魔を鞘に戻しながら歩いてきた。

「今夜の夢見は…悪そうね。」

《先輩っ!》

「ん？」

瑠奈が空を見上げると…BASTARのヘリが降下してきた。

「リイナ？」

瑠奈が目を凝らして呟くと…ヘリの後部ハッチが開いて、リイナが顔を出した。

「先輩っ！ 隊のヘリを拝借しました！早く霞ヶ関につ！」

「ありがとう！」

瑠奈はリイナの伸ばした手を掴むと…ヘリの後部ハッチに飛び乗って、霞ヶ関へ急行した。

その霞ヶ関では既に戦闘は終わり、至るところから煙が上がっていた。

「…かぁあっ！！疲れたなあ！おいつ！」

「ほ、本当ッスね…。」

レオンとウィンが薬莢の散らばっている道路に寝っ転がって休んでいた。

「お疲れさまっ。」

「シグナル隊長。」

シグナルが笑顔で歩み寄ると、レオンは起き上がって会釈をした。

「何だかんだ文句言いながらも、流石は 隊ねっ！撃破数が最多よ？瑠奈も鼻が高いんじゃない？」

「どうだかねえ？あの隊長さんの性格上…。」

レオンが瑠奈の愚痴をこぼそうとした瞬間…背後から誰かに頭を掴まれた。

「…その程度、出来て当たり前よ。シグナル、調子乗らせないで。」

「瑠奈っ！」

シグナルは瑠奈の姿を見て、安堵の表情を浮かべた。

「なっ、シグナル隊長。ウチの隊長さんはよお、部下を褒めるって事を知らねえんだっ。」

「そうッス、そうッス！うししっ！」

「みたいね？…ふふっ、あはは！」

「？…何が可笑しいの？」

瑠奈が首を傾げるなか、シグナルやレオン達は大笑いしていた。

こうして、日本の国家中枢を攻撃するというクリーチャー達の企みを何とか未然に防いだ瑠奈達…B A S T A R だった。

その頃…。

日本から、遙か北に位置するグリーンランド。

その国の真ん中にある山岳地帯に巨大な洞穴があった。

「…手強い。」

「確かB A S T A Rとか言ったか？…やるではないか、あの計画を見抜くとは。」

「たかが人間、臆する事なんかないよおっ。」

「ひとまずは、静観していよう。」

「まだ…動かないんだね？」

「そうだ。」

暗闇から四人の声が聞こえたかと思うと…暫くして、再び洞穴に静寂が戻った。

その頃…。

グラスハイムに帰還した瑠奈は、シャワーを浴びた後… 部隊のオフィスで、封魔の手入れをしていた。

「瑠奈、いるかあ？」

オフィスにレオンが入ってきた。

「いたいた！…瑠奈、一緒に飯…」

「却下。」

「瑠奈、…」

「拒否。」

「瑠奈…」

「嫌。」

「瑠…」

「無理。」

「す、全ての拒否言葉が使われた…（汗）」

「早く行きなさい。」

「へえへえ！シヨックで笑う事も忘れたってか？寂しいなあ、おい！」

レオンが笑いながらそう言うと…瑠奈が突然、机を叩いた。

「あんたに…あんたなんか、私の何が分かるっていうの！？」

「る、瑠奈？」

啞然とするレオンを睨み、出入口を指差す瑠奈。

「出ていきなさいっ！今すぐにつ！」

「ちよっ…わ、悪い。言い過ぎた。」

「いいから…出てけっ！！」

「わ、分かった…。」

レオンがオフィスから出ていくと…瑠奈は封魔を抱きしめ、椅子の上で膝を抱えると静かに俯いた。

「私の事なんか気にしないでよ…一人がいいの、私は。」

俯く瑠奈の頬を流れる涙。

「一人なら…大切な人を無くさなくて済むから。」

『…瑠奈。』

「あ。」

封魔の呼びかけに慌てて涙を拭く瑠奈。

「ごめん…何？」

『瑠奈、息抜きしませんか？』

「い、息抜き？」

瑠奈はキョトンとしながら、封魔の宝玉に問いかけた。

『そう、息抜きです。一度…寮へ帰りましょう。』

「わ、分かったわ。」

瑠奈は封魔の指示通り…一旦、寮に帰ると普段着に着替えた。

Tシャツの上にジャケットを着て、下はデニムのミニスカートという服装で瑠奈は女子寮を出た。

「わ、私…似合わないよ。」

『たまにはリフレッシュするのも大事ですよ？』

「リフレッシュって…何をしたら。」

瑠奈は仕方なく、ヘリポートの方に向かうと…ヘリを整備しているウインの姿があった

「ん？…た、隊長ツスカ!？」

髪をなびかせながら私服で歩いてくる瑠奈を見て…ウインは真っ赤になって、硬直していた。

「あ…ウイン。」

「は、はいっ！なんツスカ!？」

瑠奈はスカートをつまみ、ウィンに問いかけた。

「私の服装…可笑しくない？」

「い、いえっ！めっちゃくちゃ可愛いッスー！」

赤面しながら笑顔で敬礼するウィン。

「そ、そんなに動揺しなくても…や、やっぱり…私が女の子らしい服装でいるのは変よね…。」

俯き…悲しそうな表情を浮かべた瑠奈を見て、ウインは慌てて両手を振った。

「と、とんでもないッスー！！本当、可愛いッスよ！」

「あ、ありがとう。」

瑠奈は照れながらウィンに微笑むと、メインビルへ向かった。

「やた…：…いやったあ！！隊長が俺にだけ微笑んでくれたッス…：…ああ、もう一生お供するッス！」

ウインが笑顔で泣きながら、空を見上げ拜んでいる頃…瑠奈は研究室の和田教授を訪ねた。

「わ、和田教授…いますか？」

「今の声は瑠…あらあ！普段着なんて珍しいわねえ？」

私服の瑠奈を見て、笑顔で駆け寄る和田教授。

「た、たまには服装を変えて息抜きを…って封魔が。」

赤面して俯く瑠奈に、和田教授は優しく微笑んだ。

「そうっ！確かに息抜きは大切よ？今日は私服姿を見せに来てくれたのね。」

「あ、ち…違います。封魔のメンテナンスをお願いしたくて…あの、初めて使ったから…正宗を。」

赤面しながら動揺する瑠奈を見て、和田教授は思わず笑みを溢した。

「ふふふ！分かったわ、少し待ってなさい？」

「は、はい。」

瑠奈がスカートを引っ張りながら恥ずかしそうにソファに座っているのを見て、和田教授はまるで母親のような優しい笑顔で彼女を見つめた。

「封魔、上手いわね？彼女の冷えきった心を温めるのが。」

『ずっと長い間、近くにありますから。』

「そうね。」

和田教授が封魔の宝玉に微笑むと、研究室へシグナルがやって来た。

「失礼します！玲子教授、前回の戦闘で…えっ!？」

「シグナル…。」

シグナルはソファーに座っている瑠奈の姿を見て、硬直した。

「瑠奈あ!？」

シグナルは笑顔で駆け寄ると、瑠奈の両手を掴んだ。

「可愛いよお！瑠奈っ!！」

「あ、ありが…とっ。」

「シグナル？瑠奈が恥ずかしがってるわよっ。私に用があるんじゃないかって？」

和田教授が歩いてくると、シグナルは苦笑いしながら振り返った。

「ご、ごめんなさい…玲子教授。ちょっと、ウチの隊で使用しているプロテクターについて…。」

(皆…私がこういう姿でいるのって、変に思わないのかな?)

瑠奈は立つと、二人に歩み寄った。

「瑠奈っ、どうしたの?？」

「シグナル、和田教授…あ、あの。」

「ん？」

「なあに？」

「わ、私…皆と会ってからこんな恰好したの初めてだから…その、
こんなの似合わない…よね？」

瑠奈が俯きながら問いかけると、二人は顔を見合って笑みを浮かべた。

「瑠奈、平気だよ！」

「ふふっ、他人が自分の事をどう見てるのか気になったのね？」

瑠奈が頷くと…和田教授は、笑顔で彼女に歩み寄って顔を覗いた。

「大丈夫よ、ホントに可愛いわ。それに…貴女が意識している程、
他人は貴女に関心を持ってないわよ？きっと。」

「そうそう。私や教授は瑠奈を知ってるから、意識して見てるけど
っ。他人の目なんて気にしない、気にしない！」

「シグナル…教授…うん。」

瑠奈は笑顔で諭してくれた二人を見て…笑顔で頷いた。

自室に帰った瑠奈は、夕暮れ時の東京をジッと見つめていた。

『瑠奈、どうでした？』

「封魔。」

封魔の宝玉が淡く点滅しながら、瑠奈に話しかけた。

『たまには私服を着て、一人の女の子に戻るのも悪くないでしょう？』

「…たまになら、ね？」

瑠奈は微笑みながら、東京を眺めた。

『レオンのように、日々…息を抜かれていては困りますが。』

「ん？…確かに。ふふ、はははっ！」

『瑠奈？…今、変な事言いましたか？私。』

「ははは！…うん、言った言った！」

『どの辺りが誤っていたのか、教えていただけますか？修正します。』

「駄目よ！教えてあげないっ！」

『もう！意地悪ですね〜？』

「ふふふっ！…あ。」

瑠奈は気がついた…。

封魔と一緒にいる時だけ…自分が笑顔になっている事に。

「私…笑えるんだ。」

『瑠奈?』

「ん?何でもないわ。」

ピンポン!

「ん?...誰かしら。」

瑠奈は室内に入ると、壁に付いているインターホン受話器を手にとった。

「はい。」

《先輩!リイナですけど、夕御飯まだなら一緒に行きませんか?》

「リイナ...。」

『瑠奈、私の事は気になさらずに。部屋で待機していますから。』

「封魔…じゃあ、行ってきます。」

瑠奈は微笑みながら封魔にそう呟くと、私服のまま自室を出ていった。

翌日...。

B A S T A R の制服を着た瑠奈が封魔を腰に差し、いつもの着物を羽織ってオフィスにやって来ると…レオンが土下座して待っていた。

「…。」

「おはようございます！井上瑠奈様っ！」

「…金なら貸さないわよ？」

「ギクッ！…うげっ！？」

瑠奈が、わざとレオンの背中を踏みつけて歩いていくのを見て…ウインとリイナがクスクス笑う。

「自分の意思でパチンコをやってきたんでしょう？スったお金は自分で何とかなさい。」

「隊長！そこを何とかしてくれよ！なっ！頼むっ！」

拝むレオンに振り向くと…瑠奈は笑顔で言った。

「イ・ヤ！」

「そんなぁ！…がつくし！」

消沈状態のまま自分の席に座り、卓上で顔をうつ伏せるレオンを見て、やれやれ…と苦笑いする瑠奈。

「じゃあ、俺はへりのメンテしてくるッスー！」

「よろ〜！」

リイナが笑顔でハンカチをヒラヒラ振り、ウインを見送る。

「平和ね？今日は…。」

瑠奈は窓のブラインドを開けると、陽射しを全身で浴びながら笑顔で空を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2971z/>

《天之女神 - 討魔伝記》 ~ BASTAR・闇を狩る者 ~

2011年12月10日19時47分発行